

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和3年度 第1号 2021年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

### 令和3年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2021年8月26～30日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回る。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、登別～白老沖。
- ・ 魚群反応の比較的強い深度は、水深300～450m付近。
- ・ トロールにより漁獲されたスケトウダラのサイズは、尾叉長40cm前後の成魚が主体であった。
- ・ 水温は、胆振沖（登別沖）の水深100～200mにかけては平年よりもやや高かったが、渡島沖（南茅部沖）ではほぼ平年並み。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の184漁区（登別～白老沖）に比較的強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を上回り、2016～2017年度と同程度の値となりました（図3）。
3. 魚群反応は、主に水深130m以深に観察されました。その中でも水深300～450mに比較的強い反応がみられました（図2・4）。なお、渡島～胆振沖の水深100～200m付近には海底から離れて中層に浮いている反応がみられましたが（図2）、この水深帯の水温から判断するとスケトウダラ成魚の反応ではないものと考えられます。
4. トロール調査の結果、漁獲されたスケトウダラの体長組成は、胆振沖（白老沖）の水深350m付近及び渡島沖（南茅部沖）の水深340m付近ともに尾叉長40cm前後の成魚が主体となりました（図5；トロール地点は図1右上図参照）。
5. 調査海域の水温は、登別沖（H線沖の観測点）の水深100～200mにかけては平年（2002年度以降の平均値）よりも1℃前後高くなっていましたが、水深200m以深及び南茅部沖（D線沖の観測点）ではほぼ平年並みでした。また、スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、両地点ともおよそ水深200m以深になっていました（図6；水温観測地点についても図1右上図参照）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月下旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後にスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

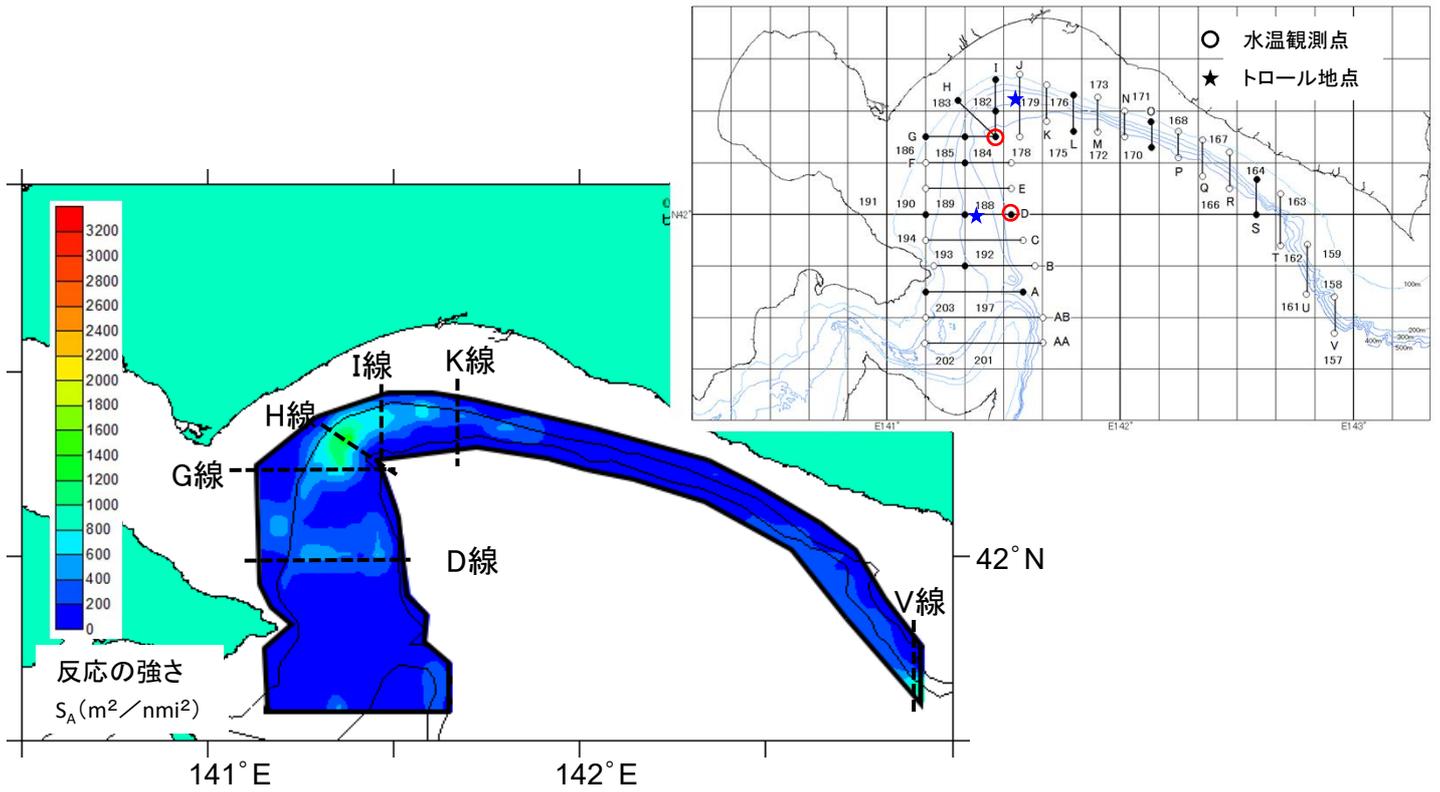


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

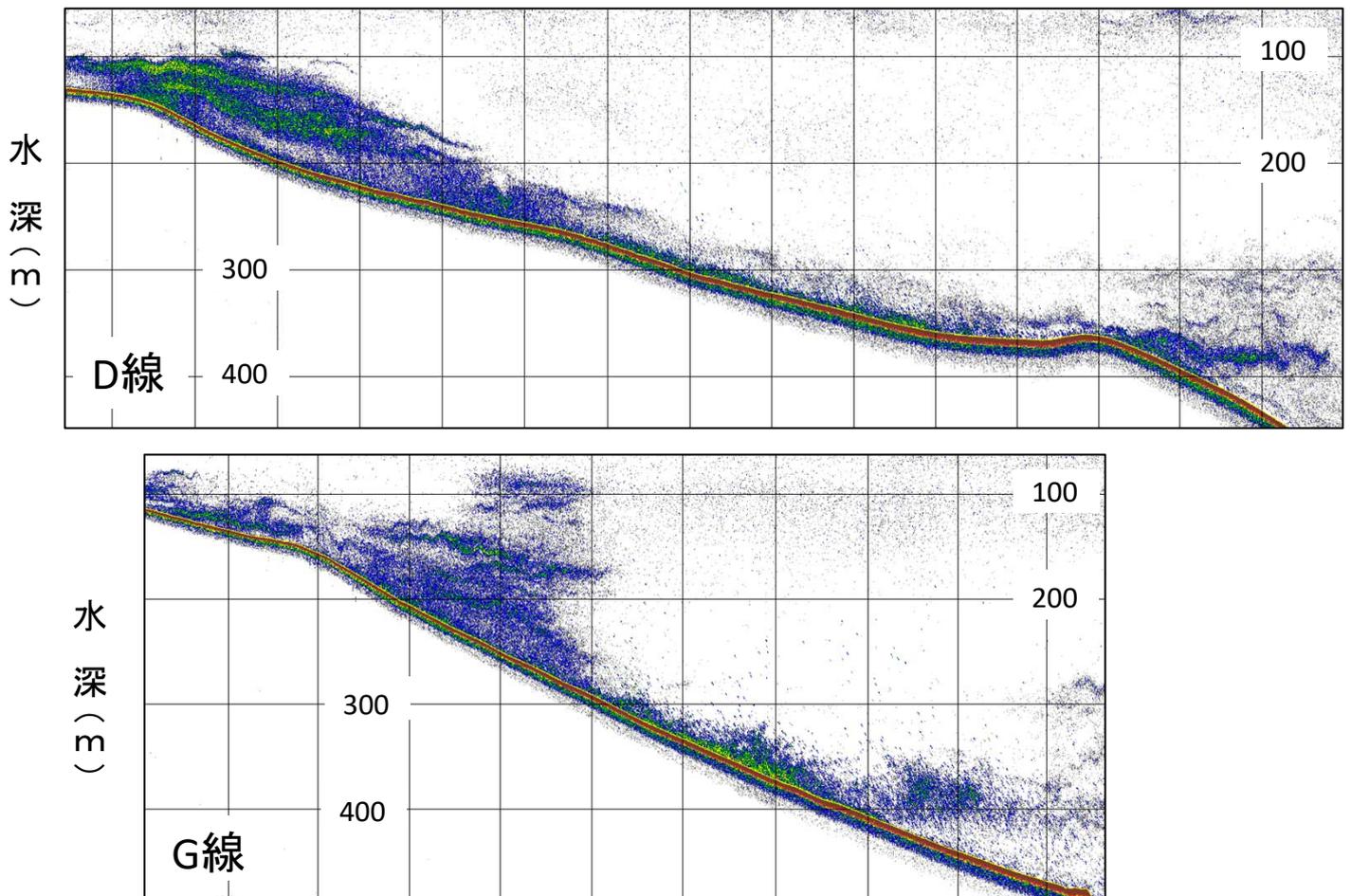


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

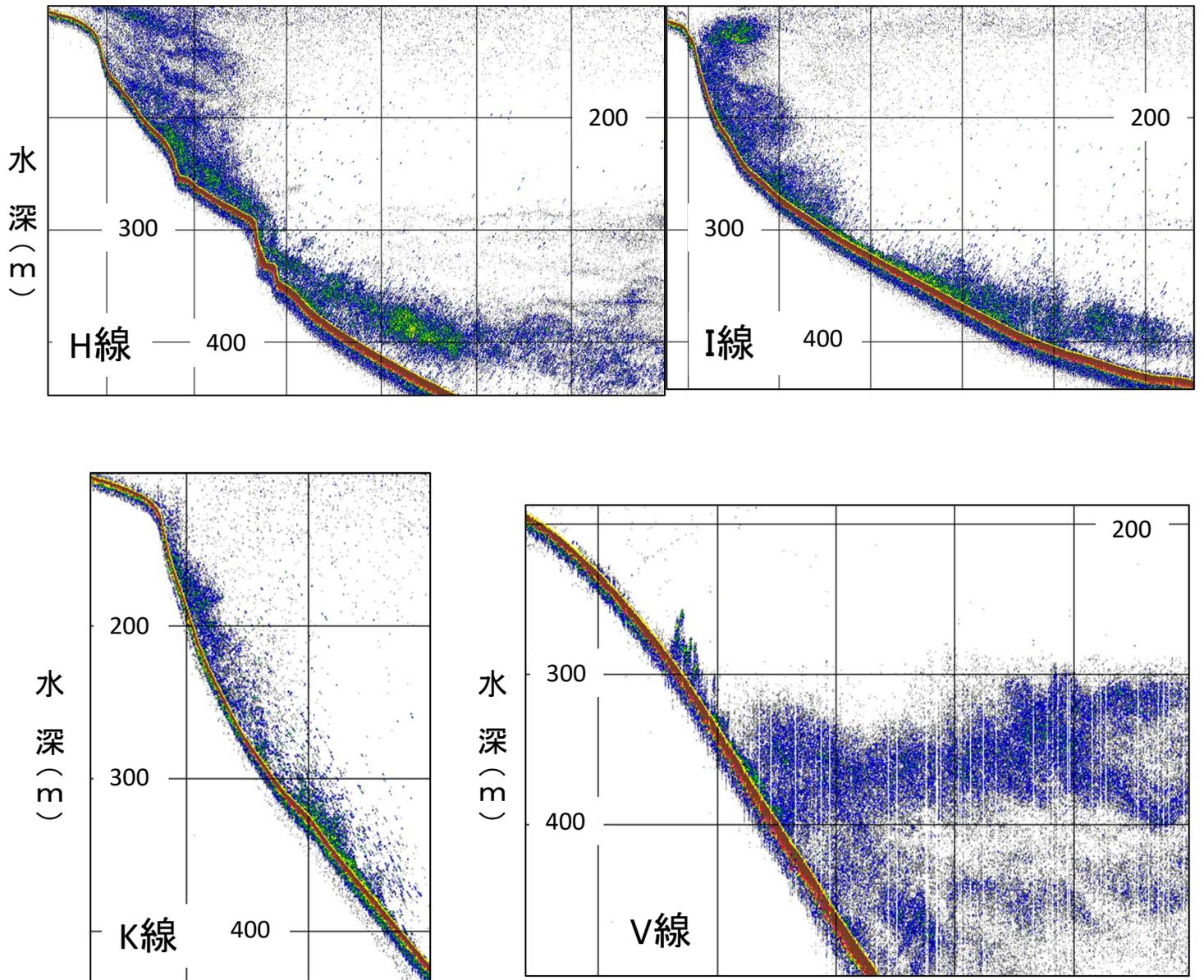


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

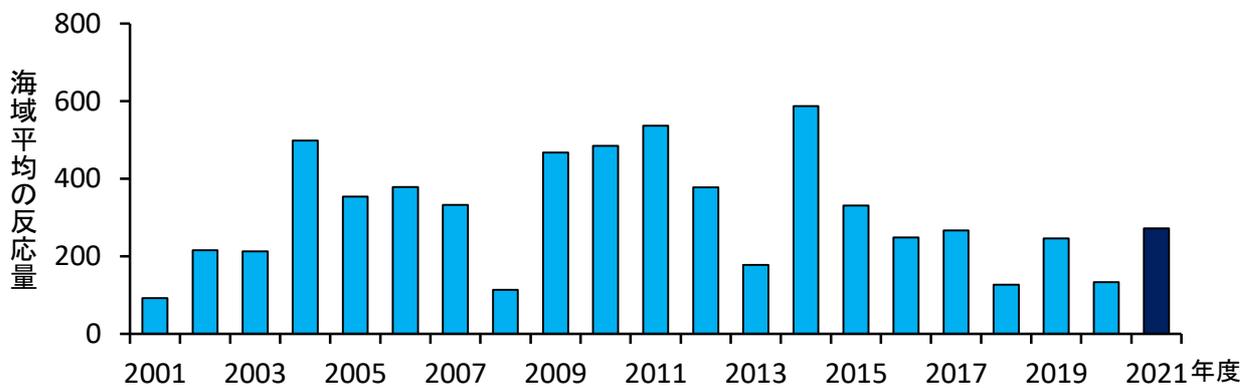


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

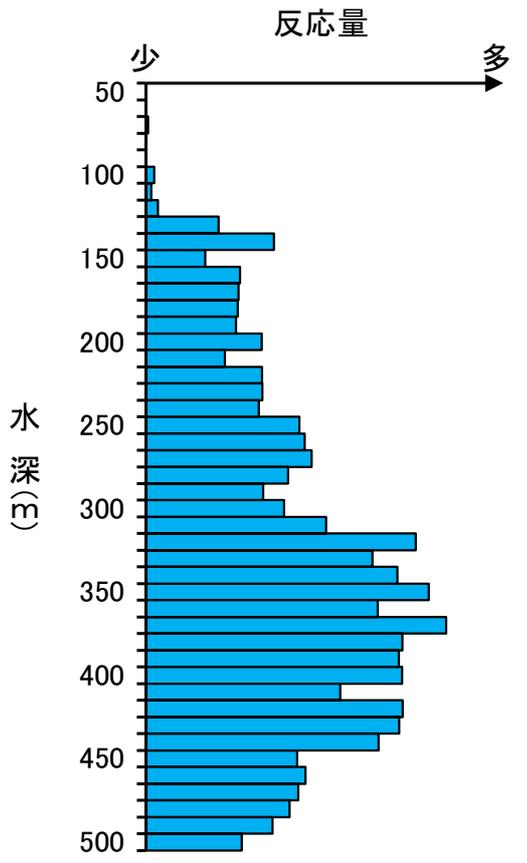


図4 水深別(10m間隔)の魚探反応量

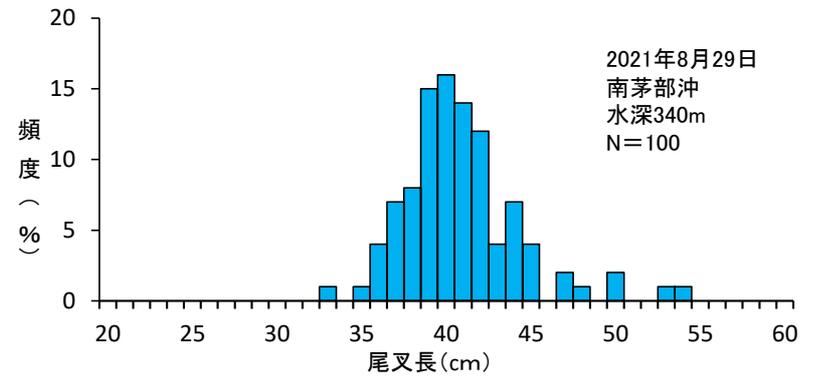
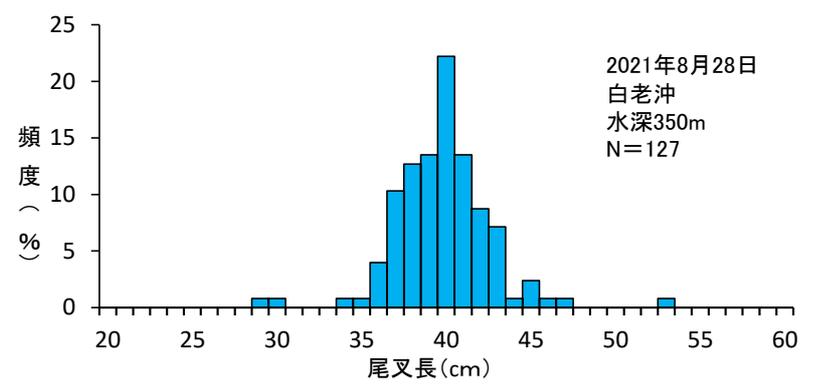


図5 漁獲物の体長組成

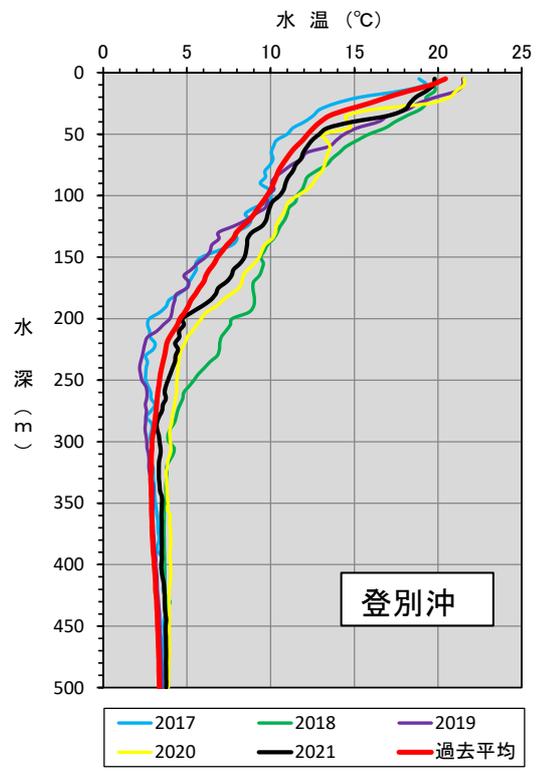
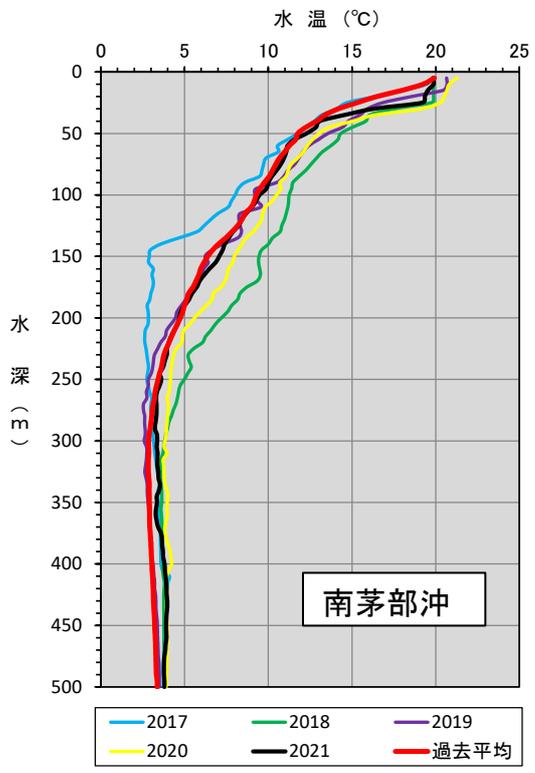


図6 8月下旬における水温の鉛直分布  
 左:南茅部沖(Dライン上), 右:登別沖(Hライン上)  
 (過去平均:本調査における2002~2020年度の各調査点の平均値)